

雑録

## ホネホネサミット 2024@しずおかを終えて

\*<sup>1</sup>赤司萌香

\*<sup>1</sup>自然史資料を未来につなぐネットワーク九州

私は2022年第1回の標本作成講座へ参加してから、博物館ネットワークセンターとご縁ができた。その繋がりです今年2024年6月10日(土)から3日間フクロウ祭りにも参加し、その成果を受けこの度10月19日(土)20日(日)2日間にわたり行われたホネホネサミット2024@しずおかへ「フクロウ祭り」の出展メンバーとして参加した。

会場は静岡市清水区の清水マリパークで、静岡駅から清水駅まで電車で約10分さらにバスで15分程度のアクセスしやすい場所であった。9時半開場で私は13時頃からの参加でしたが、既に多くの来場者で賑わいを見せていた。

骨をテーマに全国から集まった団体・個人、計45組が、骨だけでなく本剥製、仮剥製や羽毛など多様なブースを出展しており(図1)、フクロウ祭りの講師であった西澤さんと高田さんは「なにわホネホネ団」、浜口さんは「浜口標本」、藤田さんは「ほねとはね」として出展していた。同じく講師だった岩見さんと筋肉の採集した奥田さんも駆けつけてくれて、さらに前述の4名の講師の方たちにも、自分のブースの合間に、「フクロウ祭り」のブースを手伝ってくれた。

なにわホネホネ団は絶対ここでしか買えないニッチで興味をそそられる物販だけでなく、カエルの骨格を大まかな部位ごとに分けたハンコを自分で選んで押していき、カエルの全身骨格図を完成させるというコーナーもあつ

た。小さな骨があったり、そもそも右足と左足の区別が難しかったり、見た目以上に難易



図1 多様な出展ブース  
(出展ブース名)上:骨格標本と本剥製(ほねとはね), 中:仮剥製(サレジアン世田谷中学高等学校谷戸崇), 下:羽毛標本(はねはね団)

2024年11月15日受付 2025年2月27日受理

\*<sup>1</sup>熊本県宇城市松橋町豊福1695

度の高さで黙々と集中できるコーナーだった。結果間違えてしまったが、その場で答え合わせや解説もしてもらえるので、そこも含めて面白かった。

浜口標本では、本剥製の中に詰め物をする作業工程が段階的に現物を並べていた(図2)。見えないところまでとても手間暇がかかっているその美しさに感動した。会期中、ウズラ



図2 キツネ本剥製の頭部の中の詰め物と頭部剥製(浜口標本)

の剥製製作の実演も行われていた。フクロウ祭りでも人それぞれ剥き方があったので、実際に目の前で作業を拝見できることは貴重な体験だと思った。

また、展示だけでなく講演会も行われており19日は一般社団法人路上博物館・森健人さんによる3Dプリンターの話、そして20日はふじのくに地球環境史ミュージアム准教授・西岡佑一郎さんによる骨のどのような特徴を見たら良いのか、色々な動物の骨を観察しながら紹介するといった静岡ならではの講演会もあり、どちらも大変盛り上がりがあった。

私たちフクロウ祭りのブースでは連携して行われたフクロウ祭りの仕組みを説明するポスターや、フクロウ30個体の実際の写真とその胸骨を展示した(図3と4)。その一角でフクロウや、動物の骨モチーフのシールの販売も行った(図5)。私は主にシールのお店番だったが、シールのブースに惹かれて足を止めた来場者が雑談する中でフクロウのほうにも



図3 「フクロウ祭り」で展示した30個体のフクロウ全身写真と胸骨

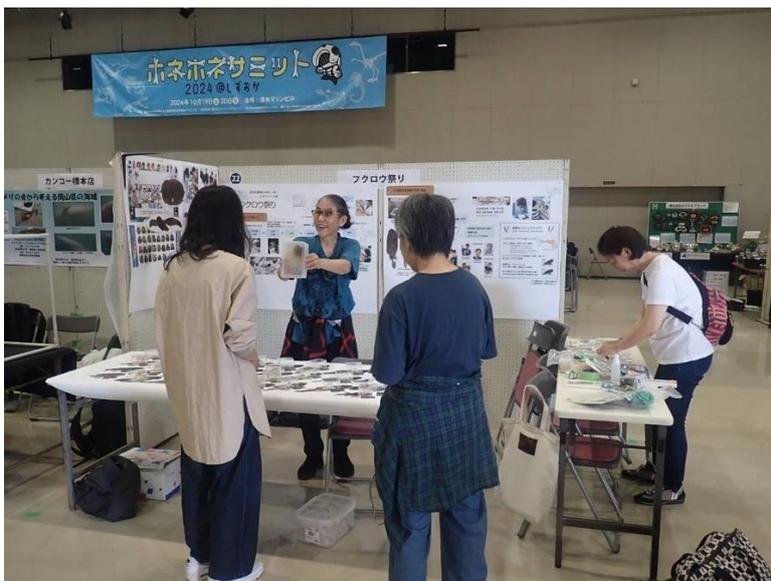


図4 「フクロウ祭り」のブース 上:準備の様子,下:来館者で賑わう様子.

興味を示して、フクロウの話  
を聞く流れは大事なことだっ  
た。誰かが主導権を持ってす  
べてを決めてしまうのではな  
く、色々な団体が一つの場に  
集まって、ホネという一つの  
軸はありながらも、コアなも  
のからなにわホネホネ団のハ  
ンコのようなライトな層も面  
白がりやすいものまで多種多  
様な広がりがあることで、入  
り口が複数できて、どんな層  
も偶発的に知らないものと出  
会う場になったのだと思う。

会場には小さな子どももた  
くさんいた。有難いことにシ  
ールの販売ブースにもたくさ  
んの子どもが来て、真剣に吟  
味する子がいたり、「〇〇の骨  
のが欲しい」と好みをはっき  
りしている子もいて、見てい  
て面白かった。他にもガチャ  
ガチャやフォトジェニックな  
被り物や(図6)、手にとって  
観察できる骨の標本やほねほ  
ねパズルもあり(図7)、大人



図5 販売したタトゥーシールの一例



図6 フォトジェニックなエゾシカの被り物  
(えぞほね団)



図7 ほねほねパズルのハンズオン標本  
(ふじのくに地球環境史ミュージアム)

だけでなく子どもも楽しめるようなブースも出展されていた。また、チラシのデザインのポップさも子連れやライトな層の方でも来場しやすい要因だったと思う。遊びに来てくれた1歳の子連れの知人も「子どもが生まれてからこういった場所に来る機会がなくなったから楽しかった」と喜んでいました。

私が標本に興味を持ったきっかけは、幼少期まだ福岡に住んでいたころよく親に頼んで連れて行ってもらった北九州市立いのちのたび博物館だった。特に生命の多様性館という360度剥製に囲まれた部屋が大好きだった。あの頃のときめきのおかげで、今住んでいる

熊本で標本作成講座を見つけて、周りの人に支えられながらご縁があって静岡に来られたことは、私の人生において豊かな経験である。

私の博物館と縁ができたきっかけは幼少期だったが、このイベントへ足を運んだ子どもたちや、まだ軽い興味しかなかった人たちが、子どもの付き添いくらいの気持ちで来た親御さんたちがこの場を楽しむことでなにか興味の糸口になることが出来るかと思うと楽しみである。

九州で活動しているので、静岡で成果発表の場を設けられたことはとても有意義な経験であった。ブースに遊びにきた人の中には、イベントのために東北からわざわざ足を運んでくれた学生もいた。一部で成果報告や、紙面やWEB上で発表したりだけでなく、多くの方が集う機会を発表することで、九州で活動しているだけでは届かなかった全国の方の目に留まったのはとても貴重な経験となった。

出展者も来場者もホネ好きであることを軸に、多くの方々がその場にいたこと自体に意義があり、人と人とが顔を合わせて対面し交流することで、次につながる何かが生まれそうなわくわくを感じさせる場所であった。

今回の経験を踏まえ今後、標本のMPC「肥後標本」の設立を計画している。「肥後標本」では標本や剥製を知識でしか知らなかった人が出会える場も設けつつ、ただ作るだけの教える-教えられる関係性ではなく、その場にいることで豊かにしあえる活動にしていきたいと考えている。